新生児乾燥濾紙血中の抗甲状腺抗体測定による母子の甲状腺障害

熊本大学医学部小児科　　松田　一郎
藤本　茂紘

昨年にひき続き，スクリーニングを終了した新生児乾燥濾紙血を用い，抗甲状腺マイクロソーム抗体（以下MCHA）を測定することにより母子の甲状腺障害などについて検討した。本年は対象数を若干増やし，かつ約2年前に調査した際，MCHA 陽性を示した小児に対しハガキによるアンケート調査を行ったので，これらを報告する。

方法・対象

MCHA の測定法は従来の方法で行ったが多検体を測定するため一次スクリーニングとして，MCHA×80までを測定し，×80にて陽性を示しているものを二次として最終力価まで測定した。

現在までに4,204名の新生児を対象とし，ハガキによるアンケートは80名について行った。

成績・考察

陽性者（MCHAにて×40以上）は180名で，陽性率は4.28%であった。この頻度は宮崎，鹿児島，沖縄についても同様の方法で検討比較してみたが，3.13%，5.62%，3.34%と他県に比べ，高率ではなかった。

次にMCHAは母親由来であることから，分娩後の母子のホルモン的な検討を行ってみたが，6～9カ月の長期経過観察しえたのは24名であった。このうち児においては一過性高TSH血症2名で，このうち1名の母親はバセドー氏病として妊娠前に内科的治療の既往がみられた。母親では現在までのところ12名が甲状腺機能障害が認められているが，前述のごとく，長期観察しえた症例が少ないことから，この頻度はもう少し多いものと推測された。

アンケートによる調査では，43名の解答がえられたが，ウエスト症候群2名，水頭症1名，先天性胆道閉鎖症（死亡）1名，原因不明の突然死1名，歩行障害1名がみられた。しかしこれらがMCHA陽性の病態とどの程度関連があるか否かは，さらに例数を増し，検討されなければならない。Mannは治療されていない甲状腺機能低下症の母親より知能障害を伴った児の誕生を報告しており，また母親が甲状腺機能亢進症の時に，奇形や抗甲状腺剤による一過性甲状腺機能低下症を伴った児の誕生がわかっていることなどから，母親の甲状腺機能をチェックするため，また母子の健康管理の上からも，本法は意義あるものと考えている。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

昨年にひき続き,スクリーニングを終了した新生児乾燥濾紙血を用い,抗甲状腺マイクロソーム抗体(以下MCHA)を測定することにより母子の甲状腺障害などについて検討した。本年は対象数を若干増やし,かつ約2年前に調査した際,MCHA陽性を示した小児に対しハガキによるアンケート調査を行ったので,これらを報告する。